

保育方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>・未来を担い生きる力となる子どもたちの全面発達を保障する努力をする。</li> <li>・保護者の労働を保障するとともに保護者がより良い条件で働き続けられるよう保護者ととも努力する。</li> <li>・保護者ととも子育てについて知恵を出し合い学び合い、子ども・保護者・保育者がともに育ち合う保育園づくりをめざす。</li> <li>・子どもの人権を守り地域の連帯の中で育て地域の人々と力を合わせ保育条件の向上に努め平和な社会をつくる努力をする。</li> </ul>
保育目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心身ともに健康な子ども</li> <li>・自分で行動し考えることのできる子ども</li> <li>・感動する心を持ち豊かに表現できる子ども</li> <li>・仲間の中にいることを喜び仲間を大切にすること</li> </ul>

## 実践・評価・反省

～心身ともに健康な子ども～

○コロナウイルス・インフルエンザなど流行した時もあったが、今まで徹底した感染対策などで抑えられていた感染症に接することが多くなったようにも思う。コロナ禍を経て、年齢による重症度や季節に応じた感染症の種類の違いがなくなっているように感じた。（溶連菌・水痘など）集団保育の為、感染症の流行に対しては対策を取る必要はあるが、ある程度の清潔感の中で生活していく事で、自己免疫力がついていくのも確かなような気がする。

○各年齢・子どもの姿に合った散歩先に出掛けたり、雪が降った時にはひなまつり会を気にしながらも雪合戦で盛り上がりたりと、各クラスで「小さい時から」「寒くても」戸外に出て身体を動かせるように活動を考えていたように思う。

○‘旬’や‘和食’を中心に考えられた給食も、家庭で食べる機会が減っているからこそ園で食べる機会が子どもたちにとっては大切な経験となっているだろう。1回目で食べなくても2回3回と提供していくうちに、少しずつ食べられるようになり、食べる食材が増え、栄養バランスも整ってくるのかなあと思う。

○社会や子どもの変化に応じて、変えて行く部分と、変えずに大切にしていける部分とあるのかもしれない。

～自分で行動し考えることのできる子ども・感動する心を持ち豊かに表現できる子ども～

○2才児の切り替えの難しさ・3才児のごね・4才児の喧嘩のオンパレード・5才児の自分の気持ちを言葉に置き換えられず体調でのシグナル……、何が今、必要なのだろうか。子どもが表出している気持ちを受け止めるとは……。そこから、言葉にならない思いを言葉に置き換えられるようにしていくには、保育者はどのような関わりをしたらよいのだろうか。子どもの「できない」からどのように興味・関心を広げていけるか。子どもの本当の願いをくすぐれる保育者の関わりとは。

○どの年齢でも自分で決める事を大切に保育をしているが、「先生、～していい？」と聞いてくる事が多い気がする。自分で（自分たちで話し合って）決めて、「これにする！」と自分たちの決断に堂々と伝えてくる子が減っているように思う。もっともっと、自分たちで決める経験を積めるようにする事が求められているのだろうか。

乳児・未満児では、お皿の中のおかずをどれから食べるか、どれだけ食べるか・パンツはどっちにするか・トイレに行くか行かないか、以上児では、何で遊ぶか、何時に終わりにするかなど、自分で決めるという事は、自分の行動に責任を持つという事。大人がその自己決定の機会を奪っている時はないだろうか。子どもの言動から、自分の保育の課題が見えてきた。今まで通りではなく、子どもの姿をみて活動・生活を組み立て直す、保育者の関わり方を変えるなど。

○‘良かれと思って’している事が、真に子どもの願い・思いに寄り添っているのか、一人ひとりに自分に問いかけてみてほしい。この文章が職員1人ひとりの心に刺さったようで、自分の保育や子育てをもう一度振り返るきっかけとなったようだった。その捉え方も批判や評価ではなく、目の前の子どもに‘最大限できる事を’と思っている関わりが本当はどうなんだろうか……。一歩引くと見えてくる物がある。などと自分の事として捉えていたように感じた。この文章を通して感じた事を共通認識として、次の関わりに活かしていけたらと思う。

～仲間の中にいることを喜び仲間を大切にすること～

早朝、窓越しに登園してくる友だちが見えると、友だちの名前を呼んで笑顔になる0才児。一人が「おかわり！」と声を上げると次々に「おかわり」の嵐になる1才児。何が楽しいのか分からないけれど2～3人でケラケラと笑い合っている2・3才児。トイレに行くだけなのに集団でワイワイ走ってくる4才児。「じぶん」も「みんな」の一員なんだと気づき、「みんな」の中で自分の思いを言葉で言えるようになった5才児。日々の生活を積み重ねる事で友だちに気づき、「たのしいね」「おいしいね」「こわかったね」と一つの事に共感し合う事で友だちの中にいる事に喜びを覚え、「みんなでやってみよう」「みんなでいこう」「みんながいたからがんばれたね」と友だちがいたからこそ達成できた事で仲間を必要とする気持ちが育っていくのだろう。そう思うと、年齢なりに友だちを求める姿があり、何気ない日々の中の積み重ねで4期の子どもたちの姿になったのだろう。集団の中で育つ大切さ。その為に個別対応が必要な時期がある。いつまでも個別対応が必要な訳ではない。だからこそ、その時期を見極められるように保育者・保護者で家庭と集団での子どもたちの姿を共有していきたい。

## 実践・評価・反省

～自分らしい保育って？自分らしいって？～

‘何気ない’関わりこそ、保育者が目の前の子どもの姿をよく観察し、「この子には」「このクラスには」今何が課題なのか。どのような支えを必要としているのか。と考察していることが、日々のやりとりの中に見出されている気がする。ちょっとした段差で転ぶヒヤリハットから、様々な起伏のある散歩先を見つけて出掛けたり、子どものリクエストを聞いて活動を決めたり、「今日の活動どうだったかな～」と担任みんなで振り返ったりと保育者の子どもを見る目、集団で子どもを支えようとする知恵、保育者のそれまでの経験から育まれた感性を出し合う事が大切だと感じた。1年後、2年後、目の前の日々の積み重ねはとても大事だが、視野をもう少し広げて日々の先にある到達・通過する発達の姿を見据えると、もっと保育が楽しくなるのではないか。手立てに悩んで時には研修を受ける事で、視野が広がったり多角的に捉えられたりした。沢山話して相談・確認することで、共通認識が持て、安全確保ができたり子どもの姿・関わりを一致できたりし、チームワークの大切さを改めて感じた。自分の立場・周りの状況を見て、「今、自分にできる事とは…」と考え行動したことで、責任を持って保育をする楽しさを感じた。

～保育園の「社会的責任」とは？～

○療育が必要な子に対して、保護者や専門機関と連携をとり保育を進めてきたが、保育園でできることの限界を感じたケースを目の当たりにした一年だった。同様に、要対協など行政との連携が必要な保護者支援においても対応や連携の難しさを感じた。保育園でも療育を必要とする子どもたちが増えてきている中で、園でできる工夫や努力でなんとか対応はしているものの、本当にこれで良いのかと葛藤しながら保育してきた。子どもにとって“こうあってほしい”という私たちの思いや願いと現状とのギャップを痛感している。

○これまでの保育運動の積み重ねにより、ようやく来年度から4,5才児の対比が30：1から25：1になったとはいえ、まだまだ不十分。保育だけでなく療育の現状も知りながら、子どもにとってより良い保育や必要な療育が受けられるよう、様々な機関と連携し運動を拡げていく必要がある。

○園の評価については、保護者アンケートでは園の保育方針や保育目標、保育内容について9割が良い評価だった。アンケートの回収率も99%でほとんどの保護者が協力してくれたが、直接的な対話が難しくなっているのを感じる。保護者との連携や関係づくりにおいては、子どもの育ちを支えるためにどのように保護者に働きかけていくと良いのか、子育て支援の研修がとても良い学びになった。子どもに対しても保護者に対しても同様に、声をかけすぎず・働きかけすぎず・見守りながら自己決定を尊重できる関わりを大事にしたい。

○子育て支援センター、病後児保育室ともに、地域の必要な方が安心して利用できる場となっている。新型コロナウイルスが第5類に移行したこともあり、病後児保育室は過去最高の利用件数となった。

○保護者に個別に伝えると、「批判された」などとマイナスに受け止められる事柄も懇談会の場で全体に向けて伝えると、伝えたい内容で伝わっている事がある。実際に集って、保育者の体験を聞いたり保護者同士で伝え合ったり「うちだけじゃない」と思えたりする場が大切だと思う。